歴史知識をめぐる争奪と和解から見る帰還集団のアイデンティティのありかた
―中国新疆ウイグル自治区ホボクサイル・トルグドに着目して―

総合研究大学院大学　　チャスチャガン

本発表では、新疆ウイグル自治区に分布するオイラド･モンゴルの一部であるトルグドの歴史に関する口頭伝承を扱う。

「森の民」(oigiin irgen)とも呼ばれるオイラドはモンゴルと異なる系統であるが、13 世紀にモンゴル帝国の支配下に入って、その一部を成すようになる。モンゴル帝国の解体や再編成の過程で、オイラドは従来の集団に新しく加わった複数の集団からなる部族連合「四オイラド」と称するようになる。本稿の研究対象であるトルグドはこの「四オイラド」連合の一員であり、連合体の解体によって 1628－30 年に現在の新疆の領域からロシアのヴォルガ河周辺へ移住した。彼らはカルムイク･ハーン国を形成したが 1771 年にヴォルガ河東岸のトルグドが故地に戻った。トルグドのこの往復移住の復路を「帰還」とし、ホボクサイル・トルグドに焦点を当てる。

トルグドの間では、この「帰還」を語る口頭伝承は数多く残っている。帰還の原因、帰還の過程、帰還後の清朝の対応、帰還後の周辺民族との関係などの内容を含めて、英雄叙事詩、物語、伝説、民謡、祝福詞、早口言葉などのジャンルが挙げられる。本発表では、「サンドグが主尊を招来した」という物語を対象とする。物語の概要はこのようである。

サンドグという人がトルグドの帰還直後に主尊を招来するためチベットへ赴く。彼はダライラマに謁見したが、ダライラマは虎の尻尾で祝福を与えた。そこでサンドグは「私は西のホボクサイルから、虎の尻尾を求めてきたわけでなく、ボグダのお手からアデス頂くにきた」と言って、ダライの手を取って、自分の頭に置く。仏堂で主尊を選ぶ際には「私は血と肉から成った仏を持って帰る」と言いながら刃物で刺し回る。それがダライラマの耳に入ってサンドグに死刑を下す。サンドグは同行した人たちに「あなたたちは早く帰れ、ここへ来る途中でいる人たちをも阻止しろう。ここへ礼拝しようとする人たちにも言ってあげろう。ここは仏教の聖地じゃなく、人殺しのところだ」と告げる。それを聞いたダライラマは「この人を殺してしまうと、信者の信仰心を傷つく」と言ってサンドグを釈放する。サンドグ一行が帰るときに、ダライラマは彼らが家に着く日時を教える。もしこの日に着かないと一つの器官から離れると言い聞かせた。ホボクサイルに近づいてからサンドグはわざと時間を遅らせようと家に帰らず途中でテントを建てて泊まる。しかし彼が寝ている間に家族が傍に移動してくる。彼は自ら片目を掘って捨てる。

このように不尊な行動を起こしたサンドグが英雄視されている。ホボクサイル･トルグドではサンドグとその招来した主尊をめぐって争奪が長い間おこなわれてきた。2010 年代に入ってから新疆オイラドで影響力をもつ活仏が訓話を行いこの論争を収めようとする。

本発表では当該物語をトルグド帰還の歴史的・社会的背景におきながら集団内部での伝承・共有を考察し、トルグド集団のアイデンティティのありかたを分析する。